Vivienne’s diary １月パート２

1/30(木)：NGO 法人の仲間で、フラッキング（水圧破水法）に反対しているジェイミーとティシャが事実にきちんと対処できるよう簡単な報告をしにきました。私たちは政府の意図的な誤報を覆して、この戦いに勝つつもりです。フラッキングは一体どれだけきれいなものなのでしょうか？私がフラッキングについて一つだけよくきくのは、どういうわけかフラッキングはその他の燃料より公害汚染が少なく、きれいまたはよりきれいということです。BP の前 CEO で、Cuadrilla Resources の会長、そして政府にアドバイスをしているロード・ブラウンは、フラッキングがきれいだという仮説を広めています。彼はニュースでフラッキングは「国家の緊急事態」で、シェールガスを使うことがまるで私たちの義務であるかのように言うのです。もし何度もそうやって物事を事実であるかのように装うなら、多くの人はそれを信じ始めるでしょう。ティシャは、石炭とフラッキングのどちらが悪いのかはまだ分からないと言っています。ミネソタ大学は石炭（石炭燃料は地球上で最も公害汚染を引き起こすものになっています。）とフラッキングを比べる研究をしていますが、まだ結論には至っていません。と言うより、どちらかを選ぶのは難しいのです。

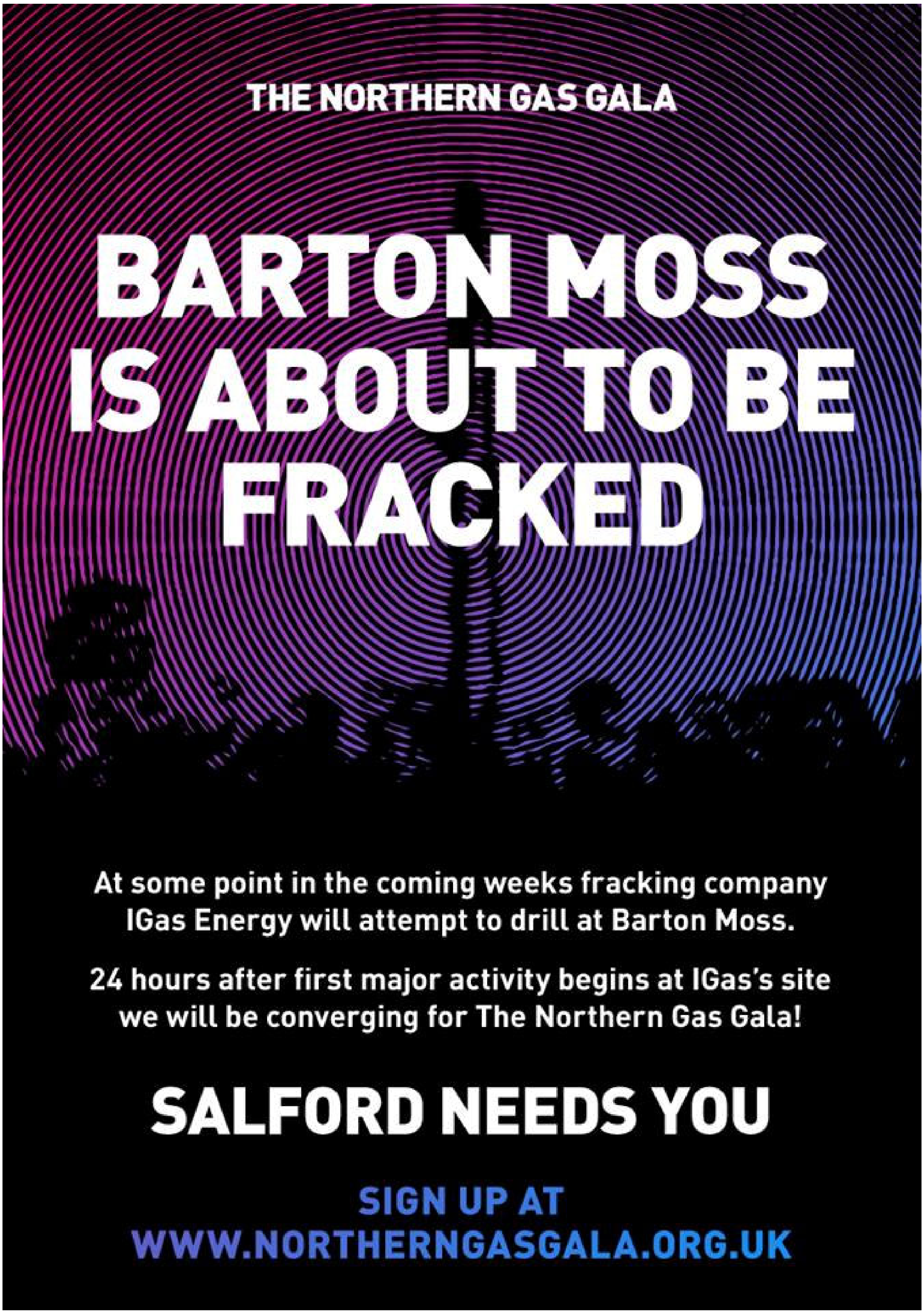
ドイツではフラッキングが選択肢に入っていないということですが、それは面白いなと私は思います。家やオフィスには断熱材が使われるようになり、ガスの消費が減ったため、ガス会社が十分な利益を得る事ができなくなりました。新しい家の中には、パッシブハウスや空気遮断をするように建てられるものもあり、光熱費がとても少なくなります。家は、住む人の体温や家庭で料理をすることにより、暖かく保たれるのです。

私はアメリカのエネルギーブームであるシェールガスの、本当の話を知る事も良い事だと思います。シェールガスがあるので石炭を必要としなくなり、その代わりに安い価格で石炭を輸出しているのですが、その事がアメリカ国内のエネルギー安全を保障していると言われています。そしてその本当の話とは、それは短期間しか見ていない経済だと言う事です。どんなことであれ、短期間しか見通せない物はこの地球には悪いことなのです。

「地球に良い物は、無駄がなく経済的にも良いもので、地球に悪い物は、経済的に悪いものである。」

アメリカは広大な割には人口が少ない場所ですが、8 万以上のフラッキングが様々な会社によって行われ、その会社は安さを売りに競い合っています。ガスの井は３年から５年しか利用できないと報告されています。ですので、

儲けるために、できる限り新しく地面を掘るのです。現状フラッキングのピークは多分過ぎていて、被害については考えられてもいないでしょう。



1/31（金）：ジェイミーとティシャのような素敵な人達と知り合えて嬉しいです。彼女は何が重要なことなのかに焦点を合わせるため、転職しました。ジェイミーはバートン・モスのクライメイトキャンプにいる彼の友人達を情

熱的にサポートしています。彼の友人クリス・オドネルは、警察には活動家として知られており、警官達は彼のためにキャンプにやってきていました。彼はカメラでその情景を撮影しライブストリームで流しました。警察が強制的に彼を地面に押しやり、画面が真っ暗になり、叫び声が聞こえてきます。http://www.salfordstar.com/archive.asp

警官達は彼の目の周りの骨をへし折りました。泥まみれで、血だらけの彼の顔写真はインターネットを通して広まりました。クリスの目がどうなったのかまだ私は知りませんが、１年前、私の大好きな友人がこけて、目の周りの玉子の殻くらい薄い骨を損傷しました。そしてそれらが筋肉を破壊し、彼女の目の玉は上に巻き上がってしまいました。これらはバートン・モスで起きた警察の不当な攻撃で、ジェイミーは、誰かが光を見たからということにかこつけて、警察がいかに一晩でキャンプを急襲したかを教えてくれました。彼らはキャンプに居た全員をテントから雨の中へと追い払い、ベッドや所有物を泥の中へと踏みつぶしたそうです。キャンプに居た人達は、私たちの地球を守ろうという運動ではとても大事な人達です。約 15 人がキャンプをしていました。砦を守るには十分な人数でしょう。26 日の「ソリダリティ・サンデイ」のために 800 名以上の人達がやってきて一丸となってくれたのはとても素晴らしいことです。反フラッキングのグループはそこまで行くためのバスを準備しました。http://www.counterfire.org/index.php/news/16946-anti-fracking-protest-solidarity-sunday-at-barton-moss-

警官がとっても攻撃的なことを私は残念に思います。1960 年代や 70 年代に私がデモに行っていた頃より、事はよりうまく行っていると思っていました。当時人々は警察を「豚」と呼び、私たちは敵意を持って警察を睨みつけていました。それ以来、人々の態度は変わり、警察も人も政府に対して敬意を払わなくなりました。それで私は、警察は以前のように、私たちに反対してはいないと思うのです。特に、今日では仕事を得るのも大変でしょう。私は一般的に警察の仕事とは、平和を保つことであるので、平和的なデモをする人々の権利を警察は守るべきだと思います。

夕方、リリー・コールとローナ・タッカーにセルフリッジで開催されたイベントで会いました。エンバイロメンタル・ジャスティス・ファンデーションが主催でした。スティーヴ・トレントが設立者で、現在のこの NGO の課題は「ポストカーズ・フロム・ザ・フロントライン（前線からのポストカード）」をバンキムンに送り、環境難民の苦境を認識してもらえるよう UN に求めることです。「赤い靴」という映画を上映し、私たち３人の女性が質問に答えました。スティーヴが司会者です。リリーはとても優しい女性で、私に会うのをいつも喜んでくれます。プレス用に写真も撮りました。